

夢をつないで

盲導犬・聴導犬・麻薬犬・警察犬・遭難救助犬。人のために労役に携わる犬の可能性について、私たちはどれくらい列挙しうるだろうか。

英国の施設では、障害者の介助犬育成施設および警察犬訓練施設を見学した。レミントンスパにある敷地内に併設され、共同で基礎訓練を実施した後、各犬のより強い特性に応じて、介助犬・警察犬との役割を持たされていく。優秀な血統の精子については、今後20年分まで冷凍保存されており、施設内部の充実面・経済面・スタッフ待遇の点では、日本とは比較しえない印象を抱いた。現在英国には、盲導犬がおよそ日本の9倍、聴導犬は40倍、介助犬に至っては60倍の頭数が活躍中である。さらに興味深いことは、捨てられている犬であれ、適性によっては使役犬に運用されている点で、これは日本では見られないことという。

他団体の紹介としては、ペットセラピーと呼ばれる人間の精神・肉体治療に、乗馬療法を実践しているWood Green Animal Shelters (精神薄弱児団体と協力して実践)や、犬や猫とのふれあいを活かそうと目指すPat Dogs (日本ではCAPP活動として実践中)、飼いの抱えるあらゆる問題に共に対処しながら、犬に対する一般の誤解を取り除きつつ、社会的立場の向上を目指すPro Dogsも存在している。あるいは、盲導犬を提供するだけでなく、盲人・目の見える他の障害を負う人々・健常者が一体となって様々なイベントに参加しよう(可能な限り盲導犬も共に)というAdventure Groupの存在もおもしろい。日英を比較すれば、実践性(団体数の多さ)・経済性・理論性(学者による先見研究)・組織性(各団体間の連係)・社会的受入れ(犬の基礎知識と啓蒙活動の充実)といった観点での違いが焦点化されていくようだ。

エコロジーの波と共に、自然と人・動物と人が長く共存共栄していくには、愛護保護の活動と共に、共存の有用性を強く訴えていく必要がある。人間<健常者>の利便性を、まず中心課題に据えてきた我々が、改めて顧みるべきことは、何か。私たちが息の暖かい動物や香る草花を求めてやまないはずのことを思い出し、それから得る精神的肉体的効用について学び、実践してゆく基盤を築くことではないかと思う。

(榊原万紀子)

動物に対する意識の差

初めてイギリスへ行って、余りの環境の良さにびっくりしました。それ以上にびっくりした事が、人と犬とがうまく付き合っている事です。犬達が家族同様として暮らしており、生き生きしていました。この差は一体なんなのでしょう。環境の違いもあると思いますが、日本では動物に対する意識が低いと思います。

今回、幾つかの動物保護施設を見学してきましたが、日本の愛護センターなどと称しながら、殺処分やゴミ扱いしているのと違って、我々と同じ生命として扱っていました。まず、施設が動物達の為にあります。広い敷地に、行き届いた管理、誰もが自由に出入りできます。行方不明などになると、人も動物も不安と心配で一杯でしょう。この施設ではお互いが安心できる場所なのです。

日本は動物を動物としてしか見ていない。イギリスの犬達を見て、動物達と一緒に暮らす事がどんなに素晴らしい事か、今以上に知りました。犬と人との間に信頼関係ができると、きつとうまく付き合っていけると思います。

(王 雅瑛)

イギリス人と共存する犬達

私達日本人には、まだまだ犬を「番犬」というためにだけに飼う人が多い様に思います。確かに「番をする」という事も大切です。しかし、犬はそれだけの生き物でしょうか…。

今回、私は初めてイギリスへ行きました。そしてたくさん犬達と出会う事ができました。ある町を歩いている時、スーパーの前でガラスごしに中をのぞいている犬がいました。その犬の目線を見ると、おじいさんが買物をしていました。おじいさんは出て来ると、犬の頭をやさしくなめました。犬はとてもうれしそうに尻尾を振り、おじいさんの後をてくてくと歩いて帰りました。犬は、おじいさんを引っ張ることもなく、どちらかというとおじいさんに合わせて歩いている様でした。この後犬の散歩をしている人を何人か見ましたが、飼い主を引っ張る犬はほとんどいませんでした。そして犬達は、常に飼い主を気にしながら歩いています。

犬といっしょに出かける人はたくさんいました。私の泊まったホテルでも、大きなシェパードと一緒に来ているおじいさんがいました。このホテルは今、日本のあちこちにある「犬と泊まれるホテル」でも何でもありません。ごく普通のホテルです。そのホテルに特別でもなく、当たり前のように人といっしょに犬が泊まれるのです。そして犬はおとなしく、誰でもさわることができます。他に電車やバスにも乗れるそうです。

イギリス人にとって犬はまさに「家族」でした。外に犬小屋はありません。人が「家族」として育てているからこそ、犬も「家族」として社会になじんでいるのです。飼い主を見るあのうれしそうな犬の目。そして自分の子どもの様に接する飼い主。この信頼関係があるからこそ、同じ社会の中で生活できるのです。私がイギリスで見た犬達は、とても生き生きとしていました。やはり犬はこうあるべきだと思いました。番犬としてつながれているだけでは、ストレスもたまります。無駄吠えもします。しかし、そうしてしまっているのは人間です。そんな環境の中では犬は何も学べません。教えられていない事はわかるはずがないのです。

日本人にも犬を「家族」として見ている人もいます。しかしそれはまだごくわずかな人達だと思います。日本も、人と犬が共存していける社会になる事を私は望んでいます。そのためには、人が変わらなければ、犬も変わりません。今、家庭犬訓練を勉強中の私にとって、イギリスはすばらしい国でした。私もイギリスの人達に負けないうががんばらなくてはと、思いました。

(三好 智美)



広い敷地に珍しい丸形の大きな犬舎(ウッドグリーン)